

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：23302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10153

研究課題名（和文）当事者視点と当事者との対話を基盤とする在宅療養移行支援システムの開発

研究課題名（英文）Constructing a transitional care system based on the perspective of and dialogue with patients and their families

研究代表者

丸岡 直子（MARUOKA, Naoko）

石川県立看護大学・看護学部・名誉教授

研究者番号：10336597

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は患者・家族との対話を基盤とした在宅療養移行支援システム構築を図るための支援プログラムを開発し、そのプログラムの有用性を明らかにすることである。患者・家族との対話を可能にする看護師の行動や看護師長の役割行動を明らかにしたうえで、患者・家族との対話場면을再構成した在宅療養移行支援研修プログラムを開発した。研修プログラムは、対話の効用と対話促進への学びを生み出し、患者・家族と看護師の対話が必要となる支援内容の実施状況を促進した。システム構築には、看護師が患者・家族との対話が可能となる環境整備と患者・家族との対話に焦点をあてた研修プログラムの実施の重要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

患者の意思決定と生活への自立支援が根幹となる在宅療養移行支援は、看護師と患者・家族との対話を通して当事者が直面する課題に取り組む必要がある。本研究で明らかにした看護師が患者・家族との対話を可能にする看護師や看護管理者の行動や患者・家族との対話を基盤とした研修プログラムの有用性は、在宅療養移行支援における看護師の対話スキルの向上に寄与し、患者の意思を尊重した在宅療養移行支援につながる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to develop a program for establishing a support system for transitional care based on dialogue between nurses and patients and their families and to elucidate the usefulness of the program. We examined the behavior of hospital nurses and the role of head nurses who enable dialogue with patients and their families. Based on the result, we developed a transitional care training program that reconstructed dialogue scenes with patients and their families. The training program introduced and promoted the need to learn about the effectiveness of dialogue and emphasized the implementation of support content that required dialogue between patients/families and nurses. For the construction of the system, we suggest that establishing an environment in which nurses participate in dialogue with patients and their families and implementing training programs that focus on this dialogue are important initiatives.

研究分野：看護管理学

キーワード：在宅療養移行支援 退院支援 退院調整 患者・家族との対話 病院看護師

## 様式 C - 19 , F - 19 - 1 , Z - 19 ( 共通 )

### 1 . 研究開始当初の背景

在宅療養移行支援 ( Transitional care ) の最終的な目標は、入院患者が社会資源を有効に活用し、病気や老いと向き合いながら退院後の新しい療養生活をスタートさせることであると考える。そのために、病院では退院支援チームによる在宅療養移行支援を行っており、看護師は中心的な役割を果たしている。看護師は退院後の生活を見据えた医療上のおよび生活・介護上の課題をアセスメントし、在宅療養維持力を高めるための指導や調整を行っている。これらの過程において、看護師は患者の思いや意思を確認しながら必要な情報を提供し、患者・家族に対して、一方向の情報の収集や提供にとどまらない双方向の「対話」を繰り返し患者・家族へ在宅療養移行支援を行うことが重要である。しかし、約 50% の看護師が患者や家族との関わりに時間を取れないことが報告<sup>1)</sup>されており、当事者との対話は十分とはいえない。さらに、当事者 ( 患者・家族 ) の視点に立った退院後の療養生活の評価とそのフィードバックによる外来部門での在宅療養支援や、再入院患者の背景要因を明らかにした上での在宅療養移行支援システムの強化が指摘されている。当事者との対話を基盤として当事者の意思や自助力を尊重することを中核とした在宅療養移行支援システムを開発するための課題と方策を探求し、患者の療養生活の質向上を促進する必要性が求められている。

### 2 . 研究の目的

当事者 ( 患者・家族 ) との対話を基盤として当事者の意思や自助力を尊重することを中核とした在宅療養移行支援システム構築を図るために必要な支援プログラムを臨床現場の看護師と協働して実施し、その成果を看護師による在宅療養移行支援の実態と意識の変化をとおして明らかにする。

### 3 . 研究の方法

患者・家族との対話を基盤とした在宅療養移行支援システム構築に関心のある地域の急性期医療を担う中規模病院の看護師と研究者が協働しながら、アクションリサーチの手法を用いて、以下の方法で実施した。

- (1) 患者・家族の退院後の療養場所への意向のズレに対する看護師の対話の在り様に関して病院の外来看護師 2 名、病棟看護師 11 名、退院支援看護師 8 名を対象に面接調査を実施した。
- (2) 外来患者および入院患者に対する在宅療養移行支援のうち患者・家族との対話を前提とする指標「患者・家族への心理的支援」の実施状況を 5 件法 ( 5 : いつも行っている ~ 1 : 行っていない ) により、看護師 ( 外来看護師 40 名・病棟看護師 236 名 ) を対象に質問紙調査を 2018 年 11 月に実施した。
- (3) 病院看護師と研究者による検討会におけるフォーカスグループインタビューの実施  
急性期病院の各部署で在宅療養移行支援の中心的役割を担っている看護師 39 名を対象に、6 ~ 7 名を 1 グループとし、患者・家族との対話を可能にするために行っている行動や患者・家族の思いに耳を傾けるための工夫についてインタビューを 2019 年 9 月に実施した。  
研究協力病院の看護師長 15 名を対象に、COVID-19 感染症の流行により感染防止対策の厳守が求められる医療現場での患者の在宅療養移行支援において、患者・家族と対話する看護師に対して看護師長が行っていることや看護師の対話スキル向上に向けた取り組みについてインタビューを 2020 年 11 月に実施した。
- (4) 在宅療養移行支援研修プログラムの参加看護師の学びと行動の変化に対する質問紙調査

2021年11月に研修プログラム(表1参照)を看護師53名に実施した。

表1 患者・家族との対話を基盤とした在宅療養移行支援研修プログラムの概要

---

研修会の主旨・方法の説明(5分)

録画視聴(25分)

患者・家族と看護師の対話場面を中心とした在宅療養移行支援事例

事例1:認定看護師と連携し、病状と心情の変化に寄り添いながらストーマ管理方法の指導を行った初発がん患者への自立支援と患者の意思により最後の療養場所を決めた事例

事例2:終末期がん患者と家族のリモート面会での対話を経て、在宅で最後を迎えたいと希望する患者の意思を看護師が確認し、訪問診療医や訪問看護師との連携で在宅死(在宅看取り)をかなえた事例

事例3:COVID-19感染症による肺炎が回復しても呼吸困難の体験から生じる死への恐怖が強い患者に寄り添い、苦痛を軽減することから回復後の生活を考え始めることができた事例

グループ討議(40分)

患者・家族の在宅療養への思いや考えに変化をもたらした看護師と患者・家族との対話の在り様や事例からの気づきや在宅療養移行支援に活用できる学びについて自由に討議

---

各グループの発表・まとめ(20分)

研修参加者への質問紙調査と分析方法

a.研修参加における学びの内容:研修終了後に、事例やグループ討議・発表からの学びや気づきについて自由記載による調査を実施し、記載内容を質的記述的に分析した。

b.研修実施前後の在宅療養移行支援状況:外来患者への在宅療養移行支援実施状況は、4因子30項目からなる外来用在宅療養移行支援質指標<sup>2)</sup>を用いて32名の看護師を対象に質問紙調査を実施した。入院患者への在宅療養移行支援実施状況は、4因子38項目からなる外来用在宅療養移行支援質指標<sup>2)</sup>を用いて29名の看護師を対象に質問紙調査を実施した。質問項目の実施状況は5件法(5:いつも行っている~1:行っていない)とし、2021年10月と2022年3月に調査を実施した。分析は項目ごとに記述統計を行い、各項目の研修前後の平均値を対応のあるt検定により分析した。

#### (5)外来部門における在宅療養移行支援

2022年11月に、外来部門における入院前・退院後の患者に対して対話に基づく在宅療養移行支援への現状を明らかにするため検討会を実施した。参加者は48名の看護師であり、検討会で発言内容および質問紙調査の自由記載内容を質的記述的に分析した。

なお本研究は、研究代表者所属大学の倫理委員会および研究協力病院の倫理委員会の承認を得て実施した。

## 4.研究成果

### (1)患者・家族の退院後の療養場所への意向のズレに対する看護師のかかわり

外来看護師は在宅療養における課題や来院時の状況を契機に外来患者と対話を行っており、得られた情報を病棟看護師と共有し、入院後に病棟看護師や退院支援看護師が患者との対話が可能となるよう行動していた。病棟看護師や退院支援看護師は入院患者・家族の退院後の療養生活への意向の変化を契機に対話を試み、療養生活維持に向けた疾病管理や介護方法の指導を通して退院後の療養生活への期待や不安から患者・家族の真意を引き出す対話を行っていた。課題として、対話するタイミングの判断と時間確保があげられた。

### (2)在宅療養移行支援の実施状況

外来看護師を対象に在宅療養移行支援質指標(外来看護師用)のうち患者・家族との対話を前提とする指標「患者・家族への心理的支援」7項目の実施状況を5件法により回答を求めた。その結果、平均得点は2.25~3.23であり、患者や家族の退院後の不安や患者の在宅でのセルフケア行動やそれを支える家族への対応を意図した項目は平均得点が高かった。一方、患者・家族の双方と対話して退院後の療養生活の方向性を導くための項目は平均得点が低い傾向であった。

病棟看護師を対象に在宅療養移行支援質指標（病棟看護師用）のうち患者・家族との対話を前提とする指標「患者・家族への心理的支援」6項目の実施状況を5件法により回答を求めた。その結果、平均得点は3.06～3.49であり、患者の退院後の療養生活への意向を引き出すことや生活や療養場所の変化に関する不安に対処する項目の得点は高く、患者・家族の双方から退院後の療養生活の方向性を導くための項目は平均得点が低い傾向であった

### (3)フォーカスグループインタビューの分析結果

在宅療養移行支援において患者・家族との対話を可能にする病院看護師の行動

看護師は【患者・家族と話す時間を生み出す】とともに、患者・家族と信頼関係をつくるために【緊張をほぐし話しやすい雰囲気をつくる】、【患者・家族の気がかりなことを優先させる】関わりを取りながら、対話の【タイミングを逃さない】ことや【きっかけをつくる】行動をとっていた。病院看護師が在宅療養移行支援をすすめるには、患者・家族と対話する時間確保にむけた看護業務マネジメント力、看護チーム内の連携および対話スキルの向上が必要であることが示唆された。

在宅療養移行支援において患者・家族と対話する看護師への看護師長の役割

看護師長は【患者・家族と接する機会を逃さない仕組みをつくる】ことに取り組みながら、看護師に対して【対話のきっかけづくりを指し示す】とともに、看護師に【患者・家族と対話する姿を見せる】行動をとっていた。そしてCOVID-19の感染防止遵守が看護師に求められるという【制限ある中での患者・家族との対話を感謝する】とともに【対話による成果を認める】行動をとっていた。看護師長は看護師が患者・家族と対話する場を作り、看護師の対話スキル向上を意図したOJTを進め、対話による変化を是認していた。看護師長が患者・家族と対話する看護師にとった役割行動はCOVID-19の流行を契機としてICT機器の活用が進展した後も活用できるものである。

### (4)在宅療養移行支援研修プログラムの参加看護師の学びと行動の変化

看護師の学びの内容

研修プログラム参加看護師の学びの内容は5カテゴリー・16サブカテゴリーにもとめられた。

表2 看護師の学びの内容

カテゴリー	サブカテゴリー
対話の持つ力	患者・家族の思いを引き出す，共に考え合う関係をつくる，不安や葛藤を解きほぐす
言葉だけではない対話の手立て	声や姿から発するシグナルを汲み取る，間の持つ意味を推しはかる
対話を成り立たせる要素	タイミングの見極め，相手軸で考える柔軟性，看護の専門的知識を用いた橋渡し，双方向の信頼関係，患者の人生や価値観に向ける関心，言葉や表情から感じ取る力
顔の見える環境づくり	時と場を考慮した雰囲気づくり，チーム相互の支え合い，IT機器の活用
学び合う環境づくり	モデルを示す，スペシャリストの対話スキルから学ぶ

研修実施前後の在宅療養移行支援状況

研修前と研修後の調査用紙が対応した20名のデータを分析した結果、外来患者に対する在宅療養移行支援において、研修後に平均得点が有意に高くなった項目は、「在宅で患者が行っていたセルフケア行動に承認の言葉を伝える」であった。

研修前と研修後の調査用紙が対応した18名のデータを分析した結果、入院患者に対する在宅

療養移行支援において、研修後に平均得点が有意に高くなった項目は、「入院前の在宅における患者のセルフケア行動に承認の言葉を伝える」、「退院後の療養生活を目指した患者（家族）の取り組みを支持する」、「入院前の介護保険・訪問看護の利用状況をとらえる」、「患者にセルフケア方法を指導する」、「退院後にも患者（家族）が実行可能なケア方法を提供する」、「継続検討が必要な課題（医療や生活・介護）を地域の医療・福祉関係者に伝える」、「退院後の経済的支援の必要性をアセスメントする」の7項目であった。

患者・家族との対話場面を再構成した事例を用いた研修プログラムは対話の効用と対話促進への学びを生み出し、患者・家族と看護師の対話が必要となる支援項目の実施状況が高まったことより、研修プログラムの有用性が示唆された。

#### (5) 外来部門における在宅療養移行支援

外来患者に対して【患者が望む場所でその人らしい生活を送ることができる】ことを目標に、【患者の療養生活上の課題に関心を持ち続ける】、【医療情報システムを利活用する】、【患者・家族との対話を可能とする環境づくり】を行うことで【患者の生活に関心を寄せてかわる】ことが明らかになった。

#### (6) 結果のまとめ

病院における在宅療養移行支援 2018 年の診療報酬の改定による入退院支援加算の新設を契機に、入退院支援部署の設立や退院支援看護師等の専任職員が配置され、入院当初から計画的な在宅療養移行支援を実施できるシステムが構築されている。これら患者への意思決定支援や自立支援は一方の情報提供や指導ではなく、患者との対話的關係の中で進める必要がある。

当事者（患者・家族）との対話を基盤とした在宅療養移行支援システムを構築するために、入院前・入院中・退院後の経過をとおして患者の療養生活に関心を寄せる、患者との対話時間を確保するための看護師および看護管理者の看護業務マネジメントの実行、患者・家族との対話に焦点を当てた研修プログラムの実施と評価を行う必要がある。

#### 引用文献

1) 厚生労働省:平成 30 年度診療報酬改定の概要。

<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000207112.pdf>

2) 丸岡直子, 武山雅志, 石川倫子, 他 6 名: 病院看護師による在宅療養移行支援質指標の信頼性・妥当性の検討. 石川看護雑誌, 17, 37-48, 2020.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 丸岡直子、石川倫子、中嶋知世	4. 巻 19
2. 論文標題 在宅療養移行支援において患者・家族と対話する看護師への看護師長の役割行動	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 石川看護雑誌	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 丸岡直子石川倫子、中嶋知世、吉田千文、樋口キエ子	4. 巻 18
2. 論文標題 在宅療養移行支援において患者・家族との対話を可能にする病院看護師の行動	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 石川看護雑誌	6. 最初と最後の頁 61 - 72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 丸岡直子、武山雅志、石川倫子、林静子、吉田千文、樋口キエ子、田村幸恵、中嶋知世、林一美	4. 巻 17
2. 論文標題 病院看護師による在宅療養移行支援質指標の信頼性・妥当性の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 石川看護雑誌	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 丸岡直子、石川倫子、中嶋知世、太田裕子、湯野智香子、出口まり子
2. 発表標題 病院看護師が在宅療養移行支援において患者・家族と対話するためにとる行動
3. 学会等名 第24回日本看護管理学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石川倫子、瀬戸清華
2. 発表標題 高齢・人口減少地域の病院看護師が実践する退院支援の実際
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 倉下陽子、丸岡直子、石川倫子
2. 発表標題 退院支援看護師が役割を果たしていると自覚するまでのプロセス
3. 学会等名 第23回日本看護管理学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Noriko Ishikawa, Naoko Maruoka, Chifumi Yoshida, Tomoyo Tabuchi, Chikako Yuno, Mariko Deguchi
2. 発表標題 Changes in the awareness and behavior of nurses who
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 丸岡直子、湯野智香子、石川倫子、中嶋知世、田村幸恵
2. 発表標題 病院看護師の「患者・家族との対話を基盤とした在宅療養移行支援研修」における学びの内容
3. 学会等名 第26回日本看護管理学会学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石川 倫子 (ISHIKAWA Noriko) (80539172)	石川県立看護大学・看護学部・教授  (23302)	
研究分担者	武山 雅志 (TAKEYAMA Masashi) (50381695)	石川県立看護大学・看護学部・名誉教授  (23302)	
研究分担者	林 一美 (HAYASHI Kazumi) (30279905)	石川県立看護大学・看護学部・教授  (23302)	削除：2022年12月8日
研究分担者	林 静子 (HAYASHI Shizuko) (30346019)	富山県立大学・看護学部・准教授  (23201)	
研究分担者	吉田 千文 (YOSHIDA Chifumi) (80258988)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授  (32633)	削除：2020年3月9日
研究分担者	樋口 キ工子 (HIGUCHI Kieko) (60320636)	群馬医療福祉大学・看護学部・教授  (32307)	削除：2022年12月8日
研究分担者	田村 幸恵 (TAMURA Yukie) (20336605)	石川県立看護大学・看護学部・講師  (23302)	



6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	中嶋 知世  (NAKASHIMA Tomoyo)  (60638732)	石川県立看護大学・看護学部・助教     (23302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関